

わが青春の譜(二)

呉海軍工廠

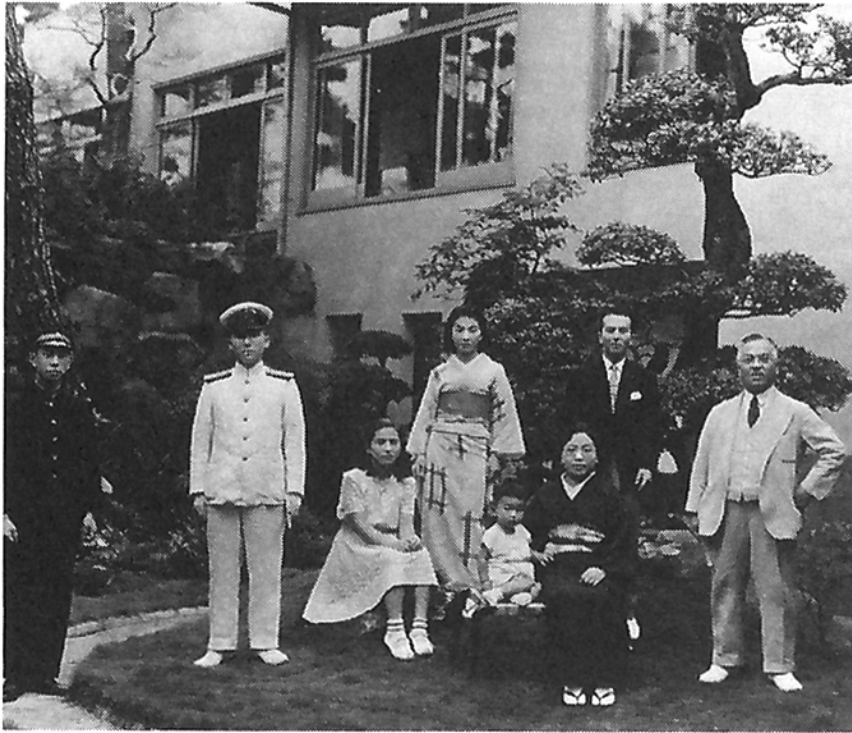
山岡浩二郎

昭和十六年(一九四一)十二月八日、太平洋戦争勃発。そのため私たちは、昭和十七年春卒業となるところを、前年十二月に繰り上げ卒業することになった。

卒業と同時に規志子と結婚、同時に株式会社山岡発動機工作所に正式入社。だが、それは形式上のことで、休む間もなく、翌十七年の正月明けには、短期二年現役として、技術中尉の肩書をもらって、呉の海軍工廠に入ることになった。

ついでながら書いておくと、当時機械工学の優れた学生たちは多くが海軍に就職、飛行機や艦船の開発に従事した。就職には、いわゆる永久就職と短期二年現役の二種類があつたが、山岡発動機工作所がすでに海軍の指定工場になつていたので、海

軍標準型6KWディーゼル発動機を製造していたので、いずれはそこへもどり、海軍で得た知識を生かすということで、ごく小人数が採用される短期二年現役として工廠入りしたのである。



海軍時代、孫吉社長邸で家族一同
右から孫吉社長、長男 康人、淑乃夫人、長女 規志子(妻)、次女 圭子、〔浩二郎〕、次男 淳男

呉は広島県南西部、広島湾の南西部に位置する港町であり、明治二十三年（一八九〇）、ここに海軍の鎮守府が置かれて以来、終戦にいたるまで、横須賀、佐世保、舞鶴とともに軍港都市として栄えた町であった。そして、呉の工廠は、戦後になってからも旧日本海軍が保有した世界最大の戦艦「大和」を建造したところとして永く記憶されるなど、数多くある海軍工廠のなかでも、もつとも科学的管理法の進んだ工廠として、当時からよく知られたところであった。

折から、対米英戦に突入したこともあつて生産力は急上昇、同時に潜水艦のディーゼルエンジンなども、従来使用していた英国式やドイツ式から、国産品へ開発が急がれる時期にあつていった。私は入廠するとすぐ精密測定の方法、作業管理の方法などのいろいろな訓練を受けたのち、造機部に配属され、早速、潜水艦のディーゼルエンジンの開発、製造、燃焼方式の改善等々の仕事に取り組むことになった。

一年ほど経った昭和十八年のある日のことであつた。上官に呼ばれると、「どうも製造がうまく進まんということから、今度軍需省で統制制度が設けられることになったんだ。すまんがお前、ひとつ、その担当官になってくれんか」と相談を受けた。いったんは任が重すぎるということを理由に断わつたが、他の先輩連中は、「今さら、会社の営業みたいなことができるか」といつて、誰も引き受け手がないという。「お前はどうせ会社にもどつても、技術畑一筋とはいかんだろう。それならこれも修業のひとつだと思つてぜひ頼む」ということで、とうとうバルブの軍需省直轄の担当官にされてしまったのである。

当時、海軍では、資材の購入はエンジン部品であれ、バルブ類であれ、すべてのものが各工廠単位で個々バラバラに下請けに注文するシステムになつていた。そのために民間の工場では、どうしても価格の高い工廠への納品を優先し、価格の低いところは後回しにする。場合によっては忌避する傾向さえあつた。そこへもつてきて、工員はどんどん陸海軍に徴用でとられていくから人手が足りない。むしろ資材そのものも不足してくる。そのため下請け工場ではパニック状態に陥るところも出てくるほどのありさまになつていた。そこで全体を把握し統括し、潤滑油の目的をもつて新設されたのがこの統制制度であつた。

バルブだけでも、その種類と数量は膨大なものだった。私は手はじめに数名の部下とともに、艦船を新造船用と修理船用に分類、バルブの種類と必要数量のチェックが一目瞭然でわかるような大きな一覧表の作製に取り組んだ。今だったらコンピュータで簡単にできる作業だろうが、その頃は

たいへんな大作業だった。そして日本中にある百数十社のバルブ会社を調べ、納品価格から発注日、納品日などを把握してみたら、とりわけ価格のアンバランスが予想以上に大きいことがわかり、これには驚いた。

そこで、これまでのうちいちばん安い納品分の価格に全体を並ばせることにし、その代わり会社ごとにバルブの種類を限定、発注量を増やすことにした。むろん、今後は、私が統制官として、全工場分を統括し一括発注するのである。

説得には約半年を要した。しかし、その結果、工場の能率は見違えるように上がるようになった。むろんその一方で、人手不足で納期が守れないなどの苦情も殺到した。私は今度は工場内の各部門の責任者と掛け合うことにした。そして徴用で来ていた工員の多くを徴用解除にして、各地の工場に帰すことにした。

発注量は増えるし、人は帰ってくるというのであるから、おかげで下請けの会社からはたいへん喜ばれ、変わった中尉だということとで私の人気も上々になった。しかし一方で、あるいは工場内の一部では、減員になったりしたこと、迷惑がったところもあったかもしれない。だが、けつして工場の作業を邪魔しようと思つてやつたことではなく、どこまでも大局的な見地から押しすすめたことであつた。事実、大いに寄与できて、たいへんよかつたと思つている。

そういえば、下請け会社に原価計算の提出を求めてもなかなか出してこないということもあつた。そこで主計中尉に相談して、辻棲の合うような原価計算の答案(雛形)をその部下につくってもらい配つたこともあつた。一見無茶なやり方にも見えようが、何分寸刻を争う時代であつた。短期間でなしとげたのであるから、これもうまくやつたなと思つている。

また、ディーゼルエンジンの生産が間に合わないというのでいろいろ調べてみた。するとここでもバルブと同じで、肝心のクランクシャフトを日立、三菱、川崎などの大手造船会社に、各工場がバラバラに発注していて、おまけに注文を受けた各会社が、鍛造から切削まで、すべてを自社でまか纳つていたものだから、生産能力をはるかにオーバー、四苦八苦の状態になつてることがわかつた。

一方、呉工場には、数万人の人間がおり、部門によつては三十尺、四十尺の大きな旋盤が泥をかぶつたまま、機械も人も遊んでいるところもあつた。事情を話して、削ってくれと頼めば、気持ちよく引き受けてくれた。かたや困つてゐることを知らないし、たとえ知つていても、よそのこととになると進んでやつてやろうとも思わない。また機械や人の余力がないかど

うかも調べない。まったく自分の殻にだけ閉じこもり、互いに正しい情報を交換して、助け合おうという雰囲気など微塵もない。「滅私奉公」とか「一億総力戦」とかいいなながら、一皮めくれば、これがあたりまえと考えられていた時代で、最前線であるべき工場内にも、驚くほどの縄張り根性、セクシヨナリズムがあつた。いちいち指摘したら、今日でも相変わらず私たちの身のまわりに数え切れないほどある、日本人のせまい島国根性のなせるわざだが、のるかそるかのかの国運を賭しか厳しい時代のなかでもはびこっていた風潮である。

同じ頃、陸軍では、南方方面や中国大陆に兵士や物資を輸送しようとするが、すでに戦局の主導権が米軍側に握られて、輸送船団が次々飛行機や魚雷に襲われて目的地に着けない。そこで同じ広島県の宇品にあつた陸軍工廠では、敵機が来たらさつと海面下に避難できるような、いわゆる上がつたり下がつたりする、潜水艦まがいの船の建造を試みたことがあつた。

ところが、下へ沈むと、水圧で船底バルブから水が入ってきて死者が出るという事故が起き、私のところへ、バルブというのはどうやってつくつたらよいか、聞きに飛んできたことがあつた。話を聞いたところ、その程度のものなら潜水艦用バルブの不良品であつても間に合うということから、適当なバルブを見つけて分けたことかあるが、これなど、陸海たがいに協力し合ったよい例のひとつといえるかもしれない。

そんな担当官生活をしていたある日のこと、バルブ会社の視察と折衝で大阪に行つたついでに、ヤンマーの本社に孫吉社長を訪ねたことがあつた。そのとき、「おまえはまだ経験も浅い青二才だ。短剣を吊つて威張つてだけいてはダメだぞ」と、私が戒められたあと、同行していた四十歳ほどの部下の技手に、腰低く深ぶかと頭を下げ、「どうか、うちの息子をよろしく」といわれた孫吉社長の姿を、今も昨日のことのように記憶している。

実際、私の仕事は、民間との間の資材発注であつたことから、誘惑の多いところであつた。そうでなくても何とか工場の仕事にありつこうと、女性をつかつたり、あらゆる手段で私たちへの接近をはかる政商が、その頃、大勢この呉にはたむろしていた。わけのわからぬうちに蜘蛛の糸に絡めとられてしまつていような危険はいつもあつた。それをあらかじめ私に教えて、身を守るようにきつちりと指導してくれたのもこのベテランの技手だつた。実に親身になつてくれたが、これもあのとときの孫吉社長の深ぶかと頭を下げられた姿があつたればこそという気がしてならない。

呉の生活

ところで、海軍とは、ごく一般的にいつて、狭い軍艦のなかの生活が基本であるから、梯子段は二段ずつ駆け昇ったり、集合命令が下ればかならず五分前に整列するなど、たえずスマートさと敏捷な行動力が要求された。

同時に、昭和十八年（一九四三）十月、学徒動員で、明治神宮競技場に出陣学徒壮行会が行なわれた折、ときの東條首相は「われ、これで二個師団の兵を得る」と喜んだのに対し、米内海軍大臣は「彼ら優秀なる学生に与える兵器なきを憂う」と言ったことに象徴されるように、陸軍にくらべて海軍は、兵士の一人ひとりに、それぞれがその機能を発揮できる場所を与えてやろうという点では、はるかに優れた組織であった。つまり人をどこまでも人と見る海軍と、人を一個の兵士としか見ない陸軍とでは、大きな隔たりがあったのである。

技術将校仲間でも、この傾向はいかんとなく発揮された。技術関係では（つまり学卒でも士官学校や兵学校を出ないものは）、階級の最高は少将であるが、管制本部の近藤市郎少将、造機部長の加藤少将ら、上はこの少将から、私のような若僧の中尉にいたるまで、全員が一家の家族のような雰囲気があり、私たちエンジンニアの卵たちをたいそう可愛がってくれた。とりわけ私は、いずれはディーゼルエンジンをつくっている会社（現ヤマハのこと、当時は海軍標準型ディーゼル発電機を製造していた）にもどるんだから、ひとつ仕込んでやろうということ、よく面倒をみてもらったように思う。

学校を卒業したばかりの若い士官にとって、海軍はよきにつけ悪しきにつけ、ずいぶん驚くことが多かったが、とにかくこの国の最高の技術とスタッフがそろっているところだけに大いに勉強になった。バルブ担当官になったことも、メーカーにとって必要な資材の発注から作業分析、工程管理など、工場管理全般にわたる管理手法、あるいはバルブ屋の経営管理にいたるまで、のちのち実際に役立つことが多かったが、これも管制本部の近藤少将以下、呉工廠の先輩方のおかげであつたと今でも感謝している。

さて、呉工廠時代は、仕事の面だけでなく生活の面でも将校はたいへん恵まれていた。食べ物にも不自由はなく、将校だけが利用できる水交舎に集まって、食事をし、酒を汲みかわし談笑したり、球突き、テニス、卓球などのスポーツなども楽しんだものだった。なかでもテニスはコートが二面あり、デビスカップの日本代表選手にもなった山岸主計中尉がおり、私

はむろん腕前にはずいぶん差があつたが、持ち前のきかん坊で、彼によく相手をしてもらつたものである。

一方、家庭のほうは、家内はそれまで家事らしい家事をやつたことがなかつたし、おまけに呉に来てから生まれた赤ん坊を抱えて、てんてこまいの暮らしを続けていた。私の当時の月給は戦時手当を入れても百二十円ぐらいでむろん赤字の連続だった。現在ヤンマーの常務をしている大石則忠君のお父さんの亮一氏が、その頃孫吉社長の秘書のような仕事をしていたので、必要の都度、汽車に乗ってわざわざお金を届けてくれた。そのうち、孫吉社長が一万円をポンと出してくれ、「今の家では狭くてやつていけないだろうから、適当な家を買つたらどうだ」と言ってくれた。

そこで買ったのが、呉市の郊外で、射的場の下、港の荷揚げ場に沿つた海岸通りという、工廠では係長クラスの地元の人が住んでいる、静かな人家の少ない古い町並みの一角の坂道にあつた、離れとちよつとした池つきの庭、隣りには二軒貸家もついている家だった。離れには、水交舎のマネジャー（コック長）をしていた目辻さんの東京の家が空襲で焼けたということから、彼の母親と妹さんを入れてあげ、貸家は工廠の友人たちに貸すことにした。それでも母屋はずいぶん広かつたので、加藤少将はじめ工廠の人たちにも気楽に出入りしてもらうようにし、いつのまにかわが家は私設の社交場のような雰囲気をもし出すようになっていった。目辻さんが気をつかつて、買い出しの途中に立ち寄つては鯛やハッサクを運んでくれたり、周囲の地元の人たちもみな、情に厚い人たちで、洗濯などの家事仕事なども手伝ってくれたりしたので、こちらに移つてからは、家内もずいぶん暮らしよくなつたと思う。

呉が百機の艦上機の爆撃によつて壊滅的打撃を受けたのは、昭和二十年三月十九日であつた。マリアナ沖海戦の敗戦によつて工廠入りしていた多くの艦船のうち、戦艦大和、巡洋艦矢矧の二隻を除いて、在泊有力艦艇のほとんどが戦闘能力を失つたといわれる空襲である。

この頃の私は、呉の南方にある倉橋島で、トンネルを掘つてつくつた地下の施設で、特殊潜航艇のような特攻兵器の開発に従事していた。その日も勤務のため埠頭のほうへ歩いていときだった。突然警報が鳴り、たちまち一トン爆弾、三トン爆弾が雨あられのように降つてきたのである。見上げると、まさに自分の頭上で爆弾が投下されるのがわかつた。加速度的におかげでそれは遠くへそれたが、もう逃げてムダなことだけははつきりわかつた。私は覚悟をして、松の木の根元にあぐらをかき、運がよければ助かるだろうと、敵機が通り過ぎるのを待った。

軍の重要な部署は、工廠のうしろの山をえぐった、頑丈な鉄扉の奥の洞窟内にあつたから無事だったものの、工廠のほとんどはこの日に壊滅、ドックもガタガタになって使えなくなってしまう。そして、挺身隊の若者をはじめ五千人もの人々が死んだ。私の家は郊外にあつたために助かった。空襲の知らせに、孫吉社長からは一万円の見舞金が届いたが、早速私はそのお金で頑丈な防空壕をつくることにした。奥行き十メートルのコの字型の穴を掘って、奥には三畳ほどの部屋をしつらえ、鉄の扉をつけた。直撃弾を受けないかぎりは大丈夫のはずで、緊急時には、いつも面倒をみてくれる近所の人たちとともに入ることにした。

終戦前後

終戦前の一時期、私は喘息に悩まされて、転地療養が必要ということから、しばらく三菱神戸に配属替えになったことがあつた。まもなく呉にもどつたが、そこから終戦直後にかけて、書きとめておきたいことが二つばかりある。その一つは私か軍刀をつくつた話だ。

この頃になると敗色は日増しに濃くなり、沖縄守備隊の全滅や日本中の都市という都市が焼土となるなかで、米軍の本土上陸作戦もま近いとされ、本土作戦計画に拍車がかけられるようになっていた。

そんな折、「山岡なら資材にも精通しており、下請けにも手づるがあるだろう」ということで、東京のエライ人から軍刀の大量生産を頼まれたのであつた。東京の空襲で軍刀も焼けてしまい、これではアメリカが上陸してきても戦えないから、何千本でもつくれるならつくってほしいという注文である。呉市内をまわって、刀鍛冶にも聞いてみたが、一本つくるのに半年はかかるという。無理もない。もともと刀鍛冶は材料の選び方から、鍛造、焼刃にいたるまで全部手造りで、大量生産は行なわれないのがふつうだからである。

そこで私ほとりあえずバルブにする丸棒を持って、呉市内の仁方というヤスリ専門の町に出かけていった。そこでまとめ役の人を訪ねると、「仁方ヤスリ」というヤスリ屋の社長で、明治神宮の刀鍛冶から帰ってきたという、会ってみるとなかなかりっぱな人であつた。

「突けたらいいんだ。一つ一つ鞘に合わせんでもいいんだから」と、頼みこんだ。もともと刀鍛冶は手仕事である以上、鞘もまた一本一本それに合わせてつくられるのもあたり前になる。当然その一本にしか合わない鞘と

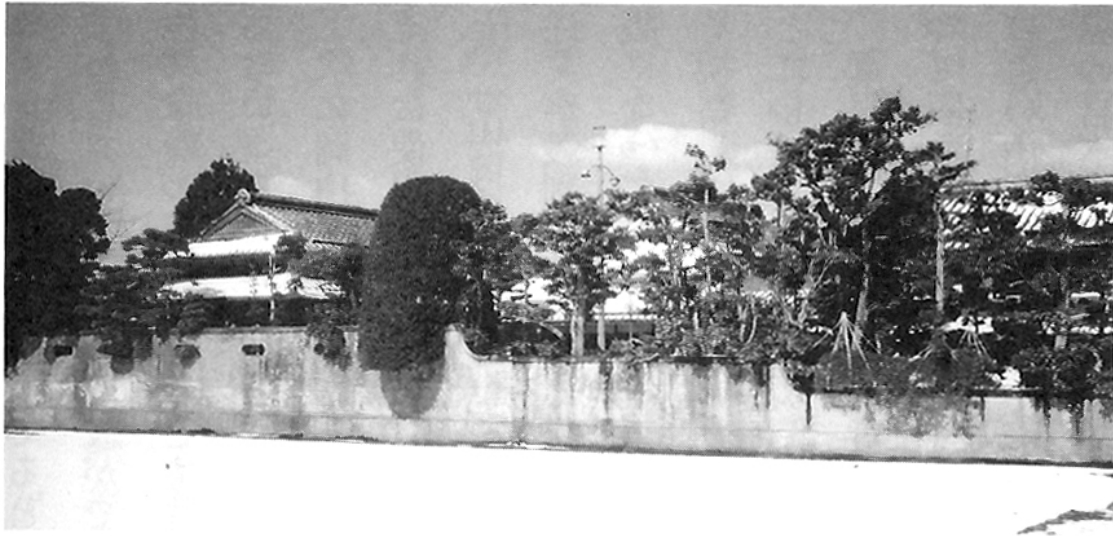
いうことになる。

私の考えていたのは、全部標準化して規格化し、大量生産を可能にするということであった。事態が急を告げていることを話し、「一定のRでやってくれ」と説得した。リミットゲージでRをつけた丸棒の鋼を種油につけて、アセチレンバーナーをあてると焼ける。焼けて炎がこつちへくると油をのせてまわしていく。すると波ができる。ただ、ヤスリは面対称だが、軍刀も面対称にはなっているけれども片一方だけで細いから、なかなかまっすぐにはならない。そこは「何とか工夫してくれ」と説得した。

次に岡山県の津山にある木村合材という会社に行つて、鞘をつくらせたが、それに使用する金具類は大阪の松尾橋梁でつくつてもらつた。その頃になると、「山岡中尉が軍刀をつくつている」ということが東京で噂になり、次々ご注文が殺到するようになった。二百本ぐらいはつくつたらうか。そのうち終戦になつてしまった。ほどなくして、造機部長から、関西方面の

経済状態等を視察してきてほしいという命令を受けた。そこでこの際家族を連れ帰ることにして家も売り払つた。

軍服姿のまま満員の貨車に揺られて大阪に着き、芦屋に家があるものと思つて阪急の駅に降り立つと、一面焼野原になつている。家のあつた高座の滝に近い山手に行つて尋ねると、かつて大阪中之島の中央公会堂を寄贈した株屋の岩本栄之助氏の持ち家だつたという豪壮な邸宅も、一トン爆弾を浴びて全焼し、孫吉社長以下家族全員、郷里に引き揚げているということだつた。孫吉社長の生まれ故郷である滋賀の湖北の高月町たかつき東阿閉には、家を継いだ孫吉社長の兄が住んでいたりつばな家があり、当時は兄も亡くなつて、兄の息子夫婦が住んでいたが、ひとまずそこに引き揚げたのである。その夜



東阿閉の孫吉社長の生家全景

は、阪急の駅近くでたまたま見つけた宿屋に泊まり、翌日、滋賀を訪ねて家族を預けた。大阪に戻り、所定の任務を終え、貨車に揺られながら呉に帰った。

ところが帰ってしばらくすると、突然、軍管区から出頭命令を受けた。なんと、この関西出張を機に、山岡は工廠の鋼材をヤンマーへ持ち帰ったという投書があったというのである。その間、ヤンマーではすでに空襲で七〇%を失った本社所在地に新社屋を建築し、戦後経営の第一歩を踏み出す一方、終戦から二週間を経ぬ八月二十七日には、朝日新聞に工場再開を告示した。この告示もまた、鋼材の横流しの傍証というかたちをとり、デマの震源地の作用をしたのである。根も葉もないまったくのぬれぎぬだけに、私は激怒した。訊問にあたった相手も同じ中尉であったが、まさにドアも蹴とばさんばかりに、「加藤少将の命令で行っただけではないか」とどなりつけた。思えばこれは、よい思い出の多い呉工廠の日々のなかで、最後につけられた汚点といってよいかもしれない。

いずれにせよ、孫吉社長の意見もあり、二年現役をそのまま延長して在任した海軍時代は、こうして幕を閉じたのであった。

(つづく)